

対談

山形大学人文学部における研究教育活動と地域貢献について

柴田 洋雄

(山形大学 名誉教授)

聞き手：是川 晴彦

(人文学部 法経政策学科)

柴田洋雄氏は昭和44年9月に山形大学人文学部に赴任され、理論経済学の科目を主に担当された。平成10年4月から平成12年3月にかけて人文学部長を歴任。平成17年9月には山形大学理事に就任されたのち、平成19年8月31日に勇退された。平成19年9月1日に名誉教授就任。今回は柴田氏の山形大学における38年間におよぶ研究・教育・地域貢献について柴田氏ご自身からお話を伺った。対談は平成20年3月27日に行われ、聞き手は、是川晴彦が担当した。

1. 山形大学着任時から今日までの研究活動について

是川 柴田先生は本学に38年もの長きにわたり奉職なさったわけですが、先生の今日までの研究活動についてお話しください。

柴田 赴任した昭和44年当時は、最適経済成長理論という数理経済学を中心に研究していて、その研究を7、8年ほど続けていました。最適成長理論というのはモデルをつくり、そのモデルの解の存在と安定性をチェックするのですが、モデルの質の良さというか、現実をより反映するかどうかというところについて競うという形で論文を作成していました。山形に来て3年目の頃でしょうか、新しい最適成長論のモデルをつくりました。これは公共的投資を含む、より一般化されたモデルでした。そのモデルにおける証明もある程度できて、自信を持ったのですが、それより1年前にアメリカで同じモデルが作られて発表されていました。私は、その論文を見ていなかったのですが、1年前に同じモデルが作られていたために、結果として発表できなかったわけです。それで、基本的に研究のパターンというかタイプを変えたのです。純粋理論を研究していたのですが、その当時は今と異なりインターネットがなかったので、外国の雑誌を見て、現物を見て、同じモデルかどうかをチェックしなければいけないのです。しかし、ここの図書館には外国の雑誌が全部は揃っていませんでしたので、見落としがあるわけです。そのときは、知り合いに論文を見てもらって、似たモデルがあるよと忠告を受けたので発表をやめましたが、下手をすると、自分自身は見えていなくても、見てまねをしたのではないかという問題が起こる可能性があります。ということで純粋理論を研究する場として山形大学は環境

としてよくないなという感じでした。現在ですと、インターネットが完備しているので、すべての論文がリサーチできるので、いいのですけれども、当時としては図書館の専門の雑誌の整備が不十分であったために限界がありました。そこで、純粋理論をやめて、他でまねができない地域の研究にかけた方がむしろオリジナリティーがあっていいかなということで、地域経済に関心をもってきたという経緯があります。

是川 そうということなのですか。

柴田 研究は当初、純粋理論だったのですが、あとから地域経済学に変わってきたということです。基本的には最適成長理論が一番盛んな時期で、当時としては早い方だったと思います。

是川 まねをするわけではなくても、結果として同じになってしまうということは、理論研究においてしばしばあり得ることだと思います。

柴田 私より1年前に発表した人がアメリカで有名な人で、ノーベル賞をもらった人なので。多くの人がある論文を見ているはずなのだという形になるのだけれども、私は見ていなかった。情報に制限があるところで研究をしている場合には、そのようなことが起こるのではないのでしょうか。専門雑誌が不備であることを痛感して、長く居るとは思わない所だったという感じでした。ところが、オリジナリティーの重要性を考えたときに、地域経済はどこでもオリジナリティーが出せるわけです。

是川 地域固有の要因に着目できるということですね。

柴田 地域分析の中で生かせるわけです。広い地域の連関表からいくつかの追加的データを加えることによって、その構成の中の小さい部分の連関表をつくることができるという論文を、東北大学の先生との共同研究で発表したことがあります。地方の、たとえば山形の4つのブロックのそれぞれの動きをどのように分析するか、今でいう格差の発生要因のようなものを分析できるという形で産業連関分析は有効に生かせたのではないのでしょうか。

是川 そうですか。

柴田 山形にいることのメリットを生かせる形で、うまい具合に方向転換できたのではないかと考えています。地域によって産業構造が異なっていることがわかったのですね。たとえば、先端産業、特に電子産業の立地が県内の4つのエリアで異なっているのですが、それはなぜかということの研究した結果、交通網の整備によって立地が説明できること、交通体系の整備が産業構造に影響することを見つけ出しました。それが現在も進めている交通ネットワークの研究につながっています。道路関係の研究者はもともと土木関係の人が多いのですが、私たちのように経済の方から道路網の整備が地域の産業経済にどのような影響を与えるかを分析する研究は少なかったです。今でも少ないとは思いますが、そのこともあって、道路整備計画の会議などでは経済系から出席する数少ないメンバーということで、いろいろな場で発言するチャンスが与えられています。

2. 最近の研究と特徴的な研究について

是川 最近の研究についてお聞かせ下さいませ。

柴田 先ほども言ったように、交通網の整備が地域にどのような影響を与えるかという研究です。理事の仕事が忙しいので、モデルをつくる、あるいは分析をするということではできないのですが、研究のコーディネートの仕事をしていました。それは医学部の先生との共同研究なのですが、治療するまでの時間によって医療費がどのように違ってくるか、医療費は治療する医療費と後遺症などを含めてですが、救急医療の効果を具体的に数値化しようという研究が有効だということでコーディネートしたわけです。医学部の先生方には治療開始時間という意識はなく、患者が来たときにどのように治すかが重要なのですが、私としては、開始の時間の早い遅いが治療費にどれだけ影響するかということが非常に重要であろうと考えていました。交通網の整備によって病院到達を早め、治療費をいかに節約できるかということは社会的に大きな課題だと思っていました。そのことに対する研究がなかったので、医学部の先生方に具体的に協力してもらいました。今回は心臓の患者さんを対象にしているのですが、ユニークな研究になるだろうと思いました。治療開始が1分遅くなると治療費がいくら高くなるかを計算できるという仮説のもとで研究したわけですが、具体的な患者さんについて調べたところ、その通りのことが証明できたのです。

是川 道路整備については、いろいろと議論になっているところですが、道路を整備することのメリットはどういうものかを示す研究として位置づけられそうですね。

柴田 具体的な判断の資料を与えることになると思います。道路整備にカネがかかる、それによって輸送時間が短縮する。そして、輸送時間の短縮が治療開始時間を早くすることによって治療費が安くなるわけです。社会全体の費用としてみた治療費の減少と道路整備費の増加、すなわち社会的便益と費用がどのようになるかについて、客観的な判断材料を提示できるのではないかと考えています。

是川 従来の研究ですと、道路整備の便益は、余暇の時間が短縮されることですか、物流がスムーズになって新たな生産物が供給されることなどを考慮していましたが、医療に注目して社会的なコストを考えたという点で、大きな貢献があったのではないのでしょうか。

柴田 そうだと思います。生産活動についての便益を考えていたのに対して、医療という新しい視点から交通網がどれだけ貢献するかについては、これまで抽象的なデータでは生命の生存率についての分析はあります。しかし、具体的に費用としてどれだけ節約できるかを示した研究がなかったので、それを具体的に提示できたのは意味があると思います。道路網は産業のインフラであるという発想がありますが、そうではなく、生活のインフラであるという視点が20世紀後半から生まれてきています。それをもっと進めた研究といえるでしょう。

是川 非常に興味深い研究ですね。この他の研究で、特徴的なものはありますか。

柴田 その当時、高度成長で社会の構造が変化して大企業と中小企業の格差の問題が生じました。そこで今後とも元気でいくためには何が必要であるかという研究をしていたのですが、そのなかで、情報が重要であるという指摘をしたことが特徴かと思います。営業活動においてどこにどういうニーズがあるかということについて、経済のモデルでは、普遍的にどこにでもあるということになりますが、具体的なところになると、その情報を持っているかいないかの違いがあると感じます。その当時、山形の企業を訪問していたときの話ですが、まだ新幹線が建設される前なので、営業マンは朝一番の特急に乗って東京に行って仕事をとってくるわけです。営業マンの人が訪問した企業で得るのは自分の仕事にならない情報もあるのです。「こういうものを捜しているのだけれど」と訪問先から言われたとき、自分の会社では作っていないが隣の会社では作っているのなら、そういう情報は持ち帰っても自分の会社では役に立たないということで破棄していたのです。ところが、そのような情報を必要な所に回せば、たとえば隣の会社はコストをかけないで顧客からの仕事を稼ぐことができるわけなので、その情報に対してカネを払ってもよいということになる。営業マンを出している会社は、自分の会社の仕事をとることと同時に、自分の会社以外の仕事をとってきても、それを持ち帰って関連する会社に販売すればカネになるわけです。そのような情報の売買があるのだという指摘をしたわけです。企業対企業では実現は難しい点もあるので、地元の商工会議所を中心として、情報をプールするシステムをつくったらどうかを提案しました。営業に人を派遣できない中小企業はプールされた情報の中から自分に関するものを見て、それが有用ならカネを払うということです。今と言うと情報化社会、すなわち情報がビジネスの対象になることを提示したことが当時としては非常にユニークであるという指摘を仙台通産局からも得ました。こういうことも、地元の企業を夏休みに1ヶ月以上訪問して聞いていくなかで、わかってきたことなのです。理論モデルにおける情報の役割と現実の経済が一体になれるのではないが実感できたのですね。

是川 早い段階で情報の重要性に着目されていたのですね。企業訪問などから生まれた現実の問題意識にもとづいて解決策を見いだしたところが特徴的だと思います。経済学として大切なことではないでしょうか。

柴田 純粋理論はもちろん大事ですが、純粋理論を研究する人も、いろいろな現場を知ることによって純粋理論に深みが増すのではないかと思います。若い人たちにも、是非、地元の企業など、いろいろな所を訪問して欲しいですね。

是川 そのことが経済学の存在意義を高めていくかもしれませんね。

柴田 現在ではないことだとは思いますが、研究室の中において抽象的なモデルだけで、計算だけで経済分析ができるというのは間違いです。そのモデルをつくる背景を考えることが大切です。

3. 山形大学における教育活動について

是川 山形大学に赴任してからどのような科目を担当したのですか。

柴田 来たばかりのときは、近代経済学の教員が少なかったこともあって、金融論を担当しました。そのあとに理論経済学、産業連関論、経済変動論を担当しました。最終的にマクロ経済学に落ち着いたわけです。

是川 マクロ経済学を担当なさって、どのようなことにお感じになりましたか。

柴田 マクロ経済学では与件、すなわち、経済のしくみに関して「こういう前提ですよ」というのがあるのですが、その前提が変わるのが現実の社会であるわけです。経済理論で説明できるのは、瞬間的なことであり、変化している状況は説明できないということを感じました。もう一つ感じたことは、人材とか資金とか、皆同じであるという前提にもかかわらず、技術や知識に違いが出てきているという点です。従来のマクロ経済学で規定している労働力や資本は均質的なものとして捉え、そして量的なものを見ていたのですが、実際には、それらは均質ではないわけです。企業の規模などにおいてボリュームが小さいということだけではなく、生産性のちがいが出てきていることが格差の背景になっているのかなと感じるのです。今までは数量の大きい小さいだけでやっていましたが、マクロ経済学においても質の違い、すなわち労働力の質や資本の質の違いを考慮した形で、研究を進めていく必要があると思っています。資本の不確実性をどのように入れて分析するかですね。生産性と言ったときに、どれだけの時間をかけての生産性なのか、その状況が10年続くのか1年しか続かないのかでは答が違って来ますが、従来は10年の状態を想定して、そのうちの10分の1として1年を分析しているわけですが、実際はそうでないと感じるのです。

是川 マクロ経済学を学習、研究するうえで大切なことは何でしょうか。

柴田 日常生活において、それを取り囲んでいる大きな環境、その環境は固定しているのではなく変化するので、その環境の変化の流れを見るのがマクロであると思います。マクロ経済学の大きな環境の変化を見ながら、自分の身近な所を対応していくことですね。置かれている環境は固定していて、その中だけという分析は間違っていると思います。マクロ経済学は国を見るときや社会を見るときの話だといいますが、個々の企業のレベルでも個人の消費者としてもマクロ的な動きを理解していないと、適正な行動にはならないでしょう。マクロの状況の変化が20世紀の後半から速いので、たとえば技術進歩が速い、国際化で競争相手の範囲の変化が激しい、モノが豊富になったので需要の変化があるなどですが、変化が激しいのでマクロ経済学の必要性が出てきていると思います。今、経済学離れが生じています。経済学が社会を説明していないのではないかと言われています。それは、不確実性や人による期待の違いをきちんと分析に取り入れていないことに課題があると思います。

是川 近年のマクロ経済学をみると、学部レベルと大学院レベルとでは、学ぶ内容がかなり異なってきていると感じます。勉強する学生さんたちも、結構、大変ではないでしょうか。

柴田 そうですね。マクロ経済学において、学部でやるべきレベルと専門としての大学院で学ぶレベルとをもう少し分けていかないと、不必要に難しくなって、学生が離れていくのではないかと思います。入門的な誰でも知っていなくてはならないマクロ経済学のレベルはどの程度なのかをおさえて、それをきちんと講義することが学部の授業で必要でしょう。

是川 学部生としては、どのあたりをおさえておくといいのでしょうか。

柴田 投資、消費、生産、国際関係、金融、特に利子といったものの持っている役割をきちんとおさえておかないといけませんね。それらの組合せで社会が説明されているのですから、一つ一つをよく理解していないと、将来の分析が困難になると思います。成長するとすれば、何が要因で成長するのですかということに対して、昔ならば、例えば労働力が増える、土地が増えれば成長しますということだったのですが、今の状態で土地が増えるということはないし、労働力が増えるということもないのですから、そうすると、成長する要因は何かということの重要性がもう一回、見直されてくるのではないのでしょうか。工学など理工系の技術があったのだけれども、今はもう一つ、ソフト、管理システム、意志決定システムに関する技術が非常に重要だと感じます。社会科学のなかにおける技術も非常に重要であって、意志決定、意志をまとめる、そのへんの所の技術が今、重要性があると思います。

是川 学部のマクロ経済学ですと、IS - LM分析ができてますが、それについてはいかがですか。

柴田 ある変化が起こったときに、どのような影響がでるか、という意味では非常にわかりやすいモデルであると思います。ある変数だけが、たとえば投資だけが変化します、というときに、投資だけが変化するわけではありません。投資が変化するときには、なぜ投資を増やすのですかということで、需要に対する予想の増加など、ほかのものも変わっているはずなのです。ところが、IS - LM分析では、他の変数が一定で投資だけが増えたときにどうなるかということなので、非常に限界的な現象を説明しているわけです。一般均衡的な分析と比較すると非常に説明しやすいというメリットはあるのだけれども、そこには今言ったような限界があるのだということを知っていないと、間違った判断になるのではないかと感じます。

是川 いわゆる外生的な変化がなぜ生じたかを、学ぶ人は常に考えなければならないということですね。

柴田 新聞などに出てくるいろいろな経済変数の相互関係が現実の中で説明されているわけですから、それを見て、感覚として経済を見る眼を持ちながら経済の教科書を読むとなると、理解が非常に正確になると思います。

4. 研究による地域貢献について

是川 柴田先生は研究による地域への貢献という点で、いろいろご尽力なされたわけですが、代表的なものについてお話し下さい。

柴田 2つの事例を挙げたいと思います。一つ目ですが、江戸時代から続いている伝統産業といわれているのですが温海町で作られているしな織りという織物があって、それを産業として自立させるという仕事をしました。以前は個人が苦勞してしな織りを作っていたのだけれども、それが買いたたかれていたわけです。後継者もいなくなっている。産業として維持するためには、共同化して、組合をつくって供給者側の力を確立すべきだと私は提案しました。5年ほどかかりましたが、結果として、組合が設立されました。小さな集落でそれまで一人一人が携っていたものを、組合化することによって、まとまりが出てきたわけです。そこで生産された織物を販売するときに、組合が販売の提供者になるということで、買い手との力関係で力を増してきたのです。よって、従来よりも高く売ることができるようになりました。一人一人が直接携わるよりもマージン率が高くなったために、後継者が確保できるようにもなったのです。地域の小さな集落でありながら人口も増えてきていますし、外から人が入ってきています。要するに地域の産業が元気になれば、地域の生活、環境もよくなることが示せたのではないかと考えています。今は、古代織りのサミットを開くにあたって、日本全体、たとえば沖縄の人たちと連携をとるくらいに元気になってきたのです。多くの場合、行政のバックアップは1年単位なので、1年単位をいくら繰り返しても、ノコギリの歯のように振り出しに戻ってしまうのです。それを5年継続したことによって、ある程度テイクオフするところまで伸びてきたわけです。具体的な組合設立というところで時間の5年が必要だということを説得して実現したことが、理論的な裏付け、すなわち経済のテイクオフの理論のもとで具体的な活動に提案したこととして理解できると思います。

是川 それぞれの業者によって組合がつくられていったのですか。

柴田 そうです。自分一人で生産、販売するならマイペースでできるわけです。ところが、出来上がったものを売るときに買いたたかれてしまうというデメリットがあります。そのところをきちんと指摘しました。組合をつくることによって、ある程度計画的に生産する必要が生じるけれども、価格はきちんと保証されるわけです。立派な産業として確立したと思っています。

是川 もう一つの事例についてお話し下さい。

柴田 それは、宮城県の岩出山町において廃校となった中学校の跡地をどう利用するかということに関する仕事です。地元の人たちの希望は、学校の跡地なので、年寄りの人や子供のための施設をつくって欲しいというものでした。それに対して、施設をつくると後の維持管理費

が大きな問題となること、要するに、多くの場合、最初の箱ものではできるだけ、維持管理費が出せなくて事業が失敗してしまうということを説明しました。そして、維持管理費がかからないような年寄りや子供のための施設として提案したのが道の駅なのです。道の駅と年寄りの関わりは何かについてですが、70歳以上の年寄りの人はセミナーを受ければ道の駅で販売する権利を得られるのです。そこでの販売についてはマージンをとりません。セミナーを受けることで学習する、頭を使うことになって、現役を維持することができます。何もしないで自宅にいと意欲がなくなってぼけてくる人が多くなると言われているのですけれども、道の駅に品を持ってきて1000円でも売ると、売れることによる喜びがあって、年寄りの人が生き生きとしてくるのです。それがよかったですと思います。いろいろな年寄りの人が持ってくる品が予測できないわけです。道の駅に寄る人にとっては予想外の品があるわけです。毎日行っても扱われている品が違うので、繰り返し行けるといってリピーターとしての魅力があるのです。岩出山の道の駅が東北一の売上になっていますが、仙台からわざわざ買いに行く人がいるのです。リピーターが多いのです。リピーターを集めている大きな原因は、年寄りの人たちが、自分で考えた物を持ってきて売るといって多様性が確保できることあると思います。基本的には量を多くつくらないで1000円程度の物を持ってきてもらいます。売り上げたお金は本人に栄養をつけてもらうために道の駅で売っている500円程度の弁当の購入に使ってもらうわけです。残りの500円については、孫のためのおみやげに使えば、家の中での位置づけも高くなりますよ、ということの説明するわけです。年寄りの人は自分でつくった物を1000円で売ったときに、売った金をカネとして持つのではなく、道の駅で全部使ってくれるわけです。権利金を払っている道の駅の中の店の人たちにとって、年寄りの人たちは敵ではなく仲間になるのです。最初のうちは、我々は権利金を払っているのに相手は無料ではないかと反発していたのですが、年寄りの人たちが売った金を自分たちの店で使ってくれることになると、互いの関係も非常によくなるのです。

是川 参加する年寄りの人たちは、販売活動に参加できることに喜びを得られるということですね。販売する物をつくることにあたってのコストは自己負担になりますが、それを上回る満足が得られるのでしょうか。

柴田 要するに、従来ですと70歳を超えてしまうと、現役でない、リタイアしているわけです。その寂しさがあるのですね。それが、今話した道の駅の例だと、80歳頃まで現役でいられるという喜びがあるのではないのでしょうか。

是川 1000円程度というと、こういったものを売っているのでしょうか。

柴田 自分がつくった盆栽ですとか、縄をよった草履のような物ですとか、山に入って掘ってきた天然の山芋ですとか、いろいろなものが考えられると思います。毎日行って売る必要はないのですから。生き甲斐を持ってもらうことの意味が重要ではないのでしょうか。

是川 道の駅が交流の場，出会いの場になっているわけですね。

柴田 そうです。本来のビジネスとして大量販売している地元の人たちにとっても丁度よいアクセサリーになっているのです。従来の道の駅は商売のための施設がみられるのですが，厚的な場というか年寄りの人たちの生活にもプラスになる施設になったという点では，全国でも例を見ない道の駅になっています。今，大成功していて，15億円くらいの売上になっているのです。聞いたところだと，年寄りの人たちが道の駅の販売に参加することによって，病気になる率が下がってきているそうです。医療費が節約できているということで，医療費をかけないための道の駅という発想は今までなかったのではないかと思います。

是川 なるほど。

柴田 コストをかけるものと，便益が出てくるものがストレートでなくても，いろいろな物があるのではないかという気がします。従来の費用便益の考え方では，直結したもののみの評価，あるいは間接的なものを除いての評価という形があるので，量的に小さい地方や田舎の場合には，今まで評価を受けにくかったのではないかと思います。

5. まちづくり，中心市街地活性化について

是川 まちづくり，あるいは中心市街地の活性化のヒントとして何かありますか。

柴田 個々の店は自分の店に来る客を確保することについては一生懸命なのですね。ところが，自分の店に来た人をそのまま帰すわけです。それはおかしいと思うのですね。来た客を隣の店に行かせる工夫があれば，そこで賑わいが出てくるのではないのでしょうか。隣にあげるといって、隣にはよくて自分は損をしようかと思われませんが，隣に来た客が自分の店に来る可能性もあるのですから，街全体が元気になれば自分の所もよくなるということはあるはずで。街に来た一人のお客さんが他の所に動けるといって形が大事だと思います。来た客すべてが買い物をするわけではないのですから，例えば映画を見たいですとか，美術館を見たいですとか，本を見たいとか，不特定多数の誰でも行けるようなスペースがあることが街の活性化の中で重要ではないかと思えます。以前，山形大学のまちづくり研究所で，活性化に関してどういう資源があるかについて調査したことがありましたね。資源がどのように活かされるかということまで考えると，一回来た客が行ったり来たり繰り返し街の中を移動するという形になれば，街の活性化が具体的になるのではないかなと感じます。

是川 資源を活かすという意味で，街の中の回遊性が重要なのでしょうか。

柴田 資源として美術館があったとします。自分の店に来た客は自分の店の商品を買うわけですが，美術館でこういう展示をしていますということを伝えれば，客は美術館に行くことになるでしょう。そうすると街の中を歩く人が二倍になるわけです。美術館だけでなく，映画や

演劇の情報を伝えるなどすれば、来た人を繰り返し街の中で動かすことができるのではないかと思います。

是川 回遊性を高めて、街の滞在時間を長くするということですね。

柴田 そうです。今言ったようなことを個店の人たちが発想して、来た客に対して街でこういうことをやっていますよという情報を提供することの重要性が示せると思います。

是川 個別に意志決定をする個店の集合体としての中心市街地における問題点を解決するための一つの工夫ということでしょうね。

柴田 そうですね。地方の銀行が銀行に来た人に対してどこでどういうことをやっていますよという街の情報を示せば、そこから本屋に行く、映画館に行く、美術館に行くという動きが生まれることになるのですから、活性化の中で金融機関は重要な役割を持っているのではないかなと思うのです。金融機関は情報の収集、提供の場所になっているのです。単に機械だけがある銀行になっているのは、街の活性化に対してはマイナスになっているのではないかと感じます。人間というのは、計画的に動くだけではなく、瞬間的に見て興味を持って衝動的に動くということが常にあるわけです。そのチャンスをできるだけ多くすることが活性化にとって重要だと思いますね。

6. 大学における地域貢献について

是川 近年の大学は、研究、教育、そして地域貢献が大きな柱になっています。大学レベルでの地域貢献を行うにあたって、何が重要でしょうか。

柴田 大学は人的資源の集まりだという見方があると思います。そこをもっと生かすべきでしょう。今の時代は、いろいろな立場の個性豊かな人たちがたくさんいて社会を構成していますので、その人たちが意見を交換して物事を決めていかなければなりません。異なった意見の人たちをまとめるということは、相当に能力がないとできないわけですね。

是川 そうですね。

柴田 そのようなまとめる役割が大学にはあるのではないかと思います。異なった意見をまとめていくことに大学の人的資源をいかに活用できるかですね。その意味で、大学の役割は大きいでしょう。普通、大学の地域貢献というと、医学とか工学、農学など理工系の学部が技術をもって直接的に行うということになるのですが、社会科学の中で、たとえば心理学とか意志決定とか、或いは説得する、論理展開する、といったことがこれから重要になってくると思います。

是川 たとえば、商店街でいろいろな意見をもつ個店がある場合に、大学がまとめていくということでしょうか。

柴田 そうですね。研究者は聞く耳を持っていることが大事だと思います。それと、相手を説得できることですね。考えている中身よりも、まず、きちんと聞いて、それを整理して相手に伝えるということが一番基本的な所だと感じます。

是川 コーディネートという要素ですね。

柴田 それが非常に重要です。今まで大学人というのは頭で考えていることを、これが正しいのだということで発言する人、いわば、べき論だけを言う人だったかもしれませんが、それは貢献の一部でしかないと感じています。異なった意見を聞いて整理してとりまとめるということが重要なことで、それが大学に期待する部分だと思います。

是川 そのためには、専門的な知識や考え方が必要になってくるということなのでしょうか。

柴田 そうですね。一人一人の専門は経済、法律、文学など違うわけですが、整理の仕方、タイプが違うわけですね。それが重要なことでして、自分の専攻分野がオールマイティなのではない。この部分は経済ならこのように説明しますよといっても、法律なら別の考えがあってもよいですね。問題によって、法律的な思考方法でまとめた方がいいのか、経済的な形でまとめた方がいいのか違ってくると感じます。その辺のところは、個人レベルではなく、大学のようにいろいろな専門の人がいるところが適切でしょう。問題によってどの分野の人が参加したらいいのかとなると、対応できるのは大学だな、と感じます。

是川 いろいろな道具がある、というイメージですね。

柴田 はい。これまでも大学は地域貢献をしてきたのですが、個人の先生としての形で貢献していたので、限定されているのですね。各先生の集まりである人的集団を生かす意味で、大学の役割は大きくなっていると感じています。

是川 なるほど。

柴田 行政と民間の意見の違いを調整するのも大学です。行政に対してきちんと意見を言うことも大事です。大学は官につくわけでも民につくわけでもなく、理屈の世界でどうだ、という立場ですから、両方に説得できうるのではないかと感じます。問題によって違うとは思いますが、行政においてその特色はどういうものでどこが弱いのか、民間の強いところはどこでどこが弱いのか、そして弱い物を互いに消し合うためにはどういう組合せがよいか、これらを観察しながら提案することが大学人だと思います。補完することを考慮して提案することがポイントで、強い物同士をぶつけてどちらが勝つか負けるかではだめだと思います。世の中の意志決定というのは、勝ち負けではなく、お互いに補完しあってお互いが良くなるのがポイントだと感じます。それができるのは大学人だと思います。民間同士は勝ち負けですからね。負けるのは自分の問題だということになります。民間同士ですと、格差を出すだけだなと思います。大学の場合ですと、弱い物を補完していかに強くしていくかを考えるわけですから、格差ではなくお互いに良くなるのではないのでしょうか。

是川 今回は、いろいろと貴重なお話を下さり、有難うございました。

柴田 長い間お世話になり、有難うございました。

是川 今後、ますますのご活躍をお祈りしております。